様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００４７６

研究課題名（和文）戦間・戦中期における批評家マックス・コメレルの業績と生涯

研究課題名（英文）Max Kommerell's Works and Life during the Interwar and Watimer Period

研究代表者
平井　守（Hirai, Mamoru）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：３０３０５５１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：戦間・戦中期における批評家マックス・コメレルの業績の再評価を目的にする本研究において、まず第一に、この時期のコメレルの最も重要な詩論として「抒情詩の本質について」および「自由韻律の詩と詩人の神」を取り上げ、分析を行った。第二に、学問的著作、エッセイならびに翻訳におけるコメレルの「世界文学」へのアプローチを考察し、とりわけ「閨秀詩人紫式部」および「ドン・キホーテにおける滑稽な人格化」について読解を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで非ユダヤ的、保守的思想・文学の潮流のなかに位置づけられていたコメレルの批評的、学問的業績に関して再評価を行った。まずコメレルの最も重要な詩論である「抒情詩の本質について」および「自由韻律の詩と詩人の神」をとりあげ、ゲオルゲ、ホフマンスタール、ハイデッガーら同時代の思潮のなかに位置づけるとともに、アガンベンによる言及の指摘やド・マンのリルケ論との比較を介して、今日的視点からその意義を明らかにした。また、学問的著作、エッセイ、翻訳などにおけるコメレルの「世界文学」への多様なアプローチを検証し、「世界文学」に対するコメレルの「読みのモード」（ダムロッシュ）を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The focus of this study is on revisiting the achievements of the critic Max Kommerell during the interwar and wartime periods. First, I analyzed "Vom Wesen des lyrischen Gedichts" and "Die Dichtung in freien Rhythmen und der Gott der Dichter" as his most important essays on poetry from these periods. Second, I considered again his approach to "world literature" in his academic works, essays and translations, and attempted to interpret particularly his two masterful Essays on world literature "Dame Dichterin" and "Humoristische Personifikation im Don Quijote" with a new examination into his "mode of reading".

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：詩論　抒情詩　自由韻律　世界文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景
マックス･コメレルは､ベンヤミン以後のドイツ語圏における最大の批評家と目されているが、汗牛充棟の感のあるベンヤミン研究と比べるとこれまで充分に研究の対象とはならず、たいていは、非ユダヤ的、保守的思想・文学の潮流のなかに位置づけられるにとどまっていた。しかし近年では、ドイツ本国および英米において、ゲオルゲ・サークルとの関連でとりあげられることも少なくなく、コメレルの業績自体についても、いくつかの研究書や論文集の出版が見られる。日本においては本格的研究はまだ乏しい状況である。

２．研究の目的
戦間期および第二次世界大戦中における､批評家マックス･コメレルの業績について研究する。とりわけ、この時期のコメレルの詩論の精髄とも言うべき『詩についての諸想』に所収されている二つのエッセイ「抒情詩の本質について」および「自由韻律の詩と詩人の神」の内容の正確な把握と今日的視点での再評価をおこなう。また、この間の学問的著作、エッセイならびに翻訳において展開されたコメレルの「世界文学」へのアプローチを明らかにし、そのもっとも重要な成果である二つのエッセイ「閨秀詩人紫式部」および「ドン・キホーテにおける滑稽な人格化」について読解を試みる。

３．研究の方法
『詩についての諸想』に所収されている二つのエッセイ「抒情詩の本質について」および「自由韻律の詩と詩人の神」の内容の正確な把握を通じて、コメレルの詩論の文献学的解明および文学理論としての正当な位置づけをおこなった。また、それぞれ別の雑誌に掲載され、後に『詩的世界経験』に所収された二つのエッセイ「閨秀詩人紫式部」および「ドン・キホーテにおける滑稽な人格化」の精密な読解を通じて、コメレルの「世界文学」へのアプローチを明らかにした。さらに、マールバッハ・ドイツ文学アルヒーフおよびヴュルテンベルク州立図書館シュテファン・ゲオルゲ・アルヒーフでの現地調査をおこない、未公刊の書簡資料ならびに調査と分析をおこなった。

４．研究成果
(1)
コメレルの生前出版された最後の著作である『詩についての諸想』の冒頭におさめられた論考である「抒情詩の本質について」の読解と分析をおこない、次の点を明らかにした。コメレルにとって「言語の身ぶり」としての詩的発話は、「初めてのもの言い」であり、それは「沈黙」と、「リズム」としての「命名」である。その際に「魂」と「世界」とが「震撼」と「情調づけ」のはたらきによって相互に関係をむすび、「他者」における「自己認識」が成立する。コメレルにおいて同時にそれは「世界」へと開かれたものである。コメレルの「抒情詩の本質について」は、批評家あるいは学者という以前に、みずから詩作を試み、数冊の詩集を上梓している「詩的な人間」による「抒情詩の本質」をめぐる探求の試みであると言うことができる。しかし、それは、たんなる詩的なエッセイではなく、厳密な論理性と歴史性に対する意識とに貫かれている。表面上は消去させられているかに見える同時代の趨勢に対するコメレルの批判も、ナチス体制下の文学あるいは文学研究をめぐる危機意識として暗示されている。また、この論考を背後で照らすいくつかの光源として、ゲオルゲと彼のサークルにおける「秘められたドイツ」の理念、ホーフマンスタールのエッセイ「詩についての対話」における象徴理論、ゲーテの自然研究における岩石生成理論、ハイデッガーの講演「芸術作品の起源」における言語哲学などの存在を明らかにした。さらに、コメレルに対する、ベンヤミン、ガダマーならびにアガンベンらの批評的言説をとりあげた。

(2)
『詩についての諸想』の最終章「自由韻律の詩と詩人の神」、とりわけ「ゲーテの自由韻律」および「リルケのドゥイノ悲歌」の部分の読解と分析をおこなった。コメレルによれば、ゲーテとリルケは、「自由韻律の詩と詩人の神」という観点で、共通性を有するとともに対照的な存在であった。コメレルは、ゲーテの自由韻律の展開の内に、自我と世界の間の、「神話的人格」と「神話的地平」の間の関係の変容を見いだしている。すなわち、ゲーテ自身の「心」と、「世界（＝自然）」とのかかわりがとりあげられ、その相互的な応答関係こそが、初期ゲーテの自由韻律で書かれた「讃歌」に通底するものであるとされ、ゲーテ自身の「灼熱する心」が、自由韻律詩における「詩人の神」であると主張された。一方、リルケにおいては、詩人は、「非-所有としての人間の現存在」を描き出さなければならないが、それを直接には見いだすことはできず、間接的に、人間のさまざまな「所有」を通して「人間の実存」を描くのであり、したがって、「否定」と「隣接するものの置き換え」がリルケの基本的な詩的態度となる。すなわち、リルケにおいて

は、「解釈された世界」としての「神話」に、「否定」と「置き換え」による意味の「関連」がとってかわるのであり、この「関連」こそが、神話なき時代の神話、神なき時代におけるリルケの「詩人の神」であると、コメレルは主張する。以上の読解と分析を通じて、これらの論考においてコメレルによって「自由韻律の神学的―より正確には無神学的―な意味」（アガンベン）が提示されていることが明らかになった。

(3)
学問的著作、エッセイならびに翻訳において多様に展開されたコメレルの「世界文学」へのアプローチを明らかにし、そのもっとも見事な成果である二つのエッセイ「閨秀詩人紫式部」および「ドン・キホーテにおける滑稽な人格化」について読解と分析を試みた。この時期、コメレルはそれまでの一貫した批評対象であったドイツ古典主義期の作品を離れ、「世界文学」を自らの関心対象としている。ゲーテに端を発することで知られる「世界文学」のコンセプトは、現在の文学研究においても様々なかたちで更新が試みられているが、「普遍性」のうちに「固有性」を見ると同時に「固有性」のうちに「普遍性」を見ること、そして世界の変質とそのなかでの人間の変容とを読み取ることが、「世界文学」に対するコメレルの「読みのモード」（ダムロッシュ）であったと言うことができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井守 | ４．巻<br>第25号 |
| ２．論文標題<br>コメレルと「世界文学」 | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>愛知県立大学国際文化研究科論集 | ６．最初と最後の頁<br>71-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15088/0002000227 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井守 | ４．巻<br>第23号 |
| ２．論文標題<br>コメレルの詩論（2）―自由韻律の詩と詩人の神― | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 | ６．最初と最後の頁<br>23-37 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15088/00004863 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>平井　守 | ４．巻<br>第21号 |
| ２．論文標題<br>コメレルの詩論（１）―抒情詩の本質について― | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>愛知県立大学大学院国際文化研究科論集 | ６．最初と最後の頁<br>43-63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15088/00004324 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |